

応援、母ちゃん！

—子育てしながら働く母親たちのリアル—

～ 育休でイノベーション ～

9

たまむら ふみ

玉村 文



ちょうど1年前の2021年4月に出産しました。人生で二度目の産休育休では、コロナ禍ということもあって、産院では個室で面会禁止、子育て支援拠点も休館など、自宅で過ごす時間が長くなりました。一度目の産休育休でも他者とのかかわる機会が減少することで閉塞感をもち、言葉が出てこなくて会話ができにくくなったという経験がありました。そのため、自宅中心の生活ではあるものの、社会との接点を求めています。そんなときに、出会ったのが、乳幼児のおもちゃを作っている株式会社ピーブ

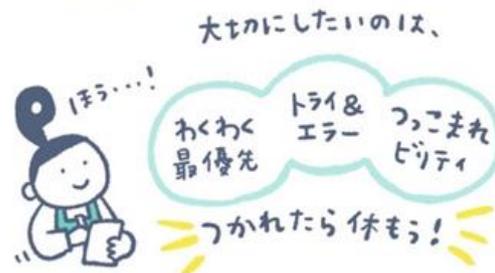
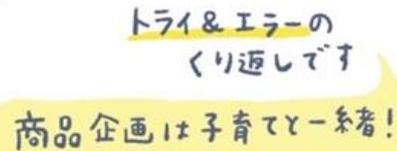
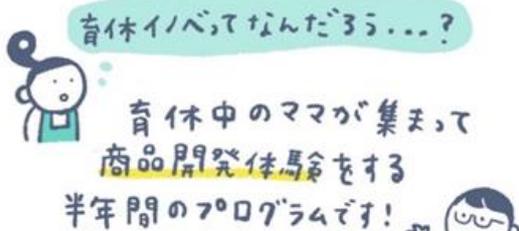
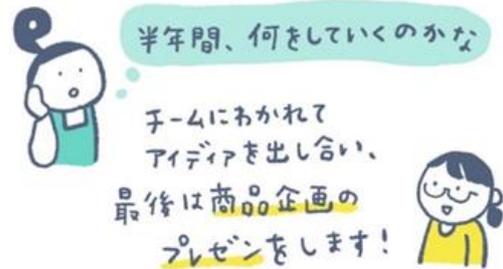
ルが実施するプロジェクト「育休イノベーションズ」(以下、育休イノベ)です。この育休イノベは、育休中に商品開発体験ができるというもので、子どもと過ごす日常から生まれるアイデアをカタチにできるという、まさに育休中だからこそできる体験となりました。今回は、商品開発の体験を紹介するのではなく、活動を通じて感じた気づきとして、①「困った」はチャンス(子育てがパワーアップする要素に)②チームのちから、③わたしが大事にしたいこと、についてまとめたいと思います。

育休イノベの活動

育休イノベの活動とは、オンラインツールを使って、全国のママたちと子育て中の出来事をシェアしながら、「困った」を解決するアイデアを練り、商品化までを体験するという半年間のプロジェクトです。5、6人が1チームになり、アイデアとグッズをプレゼンすることがゴールで、最終的には株式会社ピープルが商品開発を引き継ぐという流れです。全体の運営はピープルのスタッフの方が担当され、各チームには運営スタッフとチームメンバーの架け橋と

なる、LF（ラーニング・ファシリテーター）という役割が置かれました。LFも同じ育休イノベに登録したママの中から、チームビルディングに興味のある方が中心に立候補で選ばれました。

毎週木曜日の午後2時間を全体会として、商品開発のレクチャーや進捗の確認、社員さんからのフィードバック、プレゼン準備や発表会の時間でした。また、節目にはキャリア講座を企画していただいております。この育休イノベという活動を仕事復帰の準備にもなるようなしなかけが施されていました。全体会以外の日程を取ってチームミーティングを行い、また、グッズの試作や実験、アンケートやプレゼン準備もしていたので、



毎週 2、3 日間はこの活動に時間を使っていました。チームのオフ会もしたり、ママトーク日が設けられていたり、ママ同士で交流する時間もありました。

イラストレーターのかめさんが、この活動をイラストにまとめてくれています。このイラストにも描かれている通り、運営スタッフからは、「わくわく最優先」「トライ & エラー」「つつこまれビリティ」「つかれたら休もう」は全体でシェアする価値観として、何度も提示されました。

「困った」はチャンス、

子育てがパワーアップする要素に

この活動を通して、最も影響を受けたことは、物事の捉え方をリフレーミングすること、特にポジティブに捉えることでした。名付けてポジティブ変換力です。それは、日常生活で子育てをしていることが武器になる、という体験から得られたと思います。武器になるとは、それはつまり「困った」ことに直面することが多く、その困ったことを試行錯誤しながら解決させ、また解決までいかなくても軽減させていくことが日常だからこそです。わたし個人だけの生活なら、そこまでたくさんの困りごとに直面しない環境です。わたしのコントロール外の、しかしケアを要する子ども達の存在は、日々の成長を見せてくれながらも生活上の困難さも同時に持ってきてくれるのです。

これまで子育てしながら働くことは、同僚の負担になる、迷惑をかけることが多い

というネガティブな想いを持っていました。子どもの病気で仕事を休んだり、行事で休んだり。子育て期はどうしても仕事を休みがちになってしまうことから罪悪感もっていました。その考えがこの活動に参加したことで、子育てしていることがパワーアップの要素になるという視点をもらいました。

子育て神話

育休イノベで、困ったことやネガティブなことをポジティブに変換していくリフレーミングの視点が得られたと書いてきました。それは、子育てで当たり前とされてきたことが、実はそうではなかったという「子育て神話」への気付きでもありました。パパも参加したパパ会では、パパママ両者が感じている「子育て神話」について出していました。例えば、母乳が 1 番良いという母乳神話、自然分娩が 1 番良いという分娩神話や、「寝かしつけはママじゃない」という役割分担まで、思い込みも含めた共通する価値観や違和感が出されました。パパからは、「ママの言うことは絶対服従」というエピソードも聞き、それはうちにも当てはまるなあと自己を顧みて反省することもありました。

対人援助の視点

日常のちょっと困ったことや課題を、ア

アイデアやものづくりを通して解決するアプローチは、対人援助の仕事でもあったと感じました。

売れる商品を作るという前提よりも、テーマを深掘りしてその背景にある子どもや社会への想いを言語化していく、そこに解決を見出すことで結果的に商品になるというプロセスを経ていきました。これはアウトプットが異なるだけで相談援助と同じプロセスだと思います。例えば、いまの困っていることを課題として設定し、どんなミライだと笑顔になれるのか想いを出し合ってミライを描くと説明するとわかると思います。

相談援助と少し違う視点といえば、「新たなアウトプット」にこだわるところです。つい具体化できそうなアイデアを優先して考えたくなくなってしまいましたが、運営スタッフから「カテゴリーイノベーション」や「ムーンショット」などの概念を提示され、技術的に可能かどうかはさておき、いまないものを生み出すためにどんなミライを迎えたいのかを徹底的に想像しあいました。

チームのちから

育休イノベの活動は5、6人が1チームになって半年間を一緒に活動します。チームメンバーは運営スタッフが事前に決めていました。各チームには運営スタッフとメンバーをつなぐLF（ラーニング・ファシリテーター）という役割が置かれていましたが、それ以外の役割は毎回チームで話し合っ

決めていました。

チームメンバーは、産休育休中の母親ということが共通点で、それ以外は年齢も住んでいる地域も、そして職種も異なる方々ばかりでした。わたしが入っていたチームは、東京都、神奈川県、高知県、山口県在住で、第一子の産休育休中が3名、それ以外が複数育児での育休中でした。メンバーの職業もIT系、保険代理店勤務、看護師など、それぞれの背景は異なりました。

そんなメンバーと半年間活動をしていくのですから、それぞれの価値観や考え方の癖などは異なります。もちろんこの育休イノベで初めて関わることになったメンバーですので、お互いに知り合っていながらプロジェクトも進めていくことになります。ですので、最初に「行動指針の確認、ルールづくり」の機会を持ちました。例えばわたしが所属したチームでは、「土日は稼働しない」「敬語禁止」「家庭優先」「休んだメンバーが復帰したら“おかえり”と迎える」ことをルール化しました。行動指針については、全体で共有されていた①ワクワク最優先、②トライ&エラー、③つつこまれビリティ、④疲れたら休もうというものです。これらのルールや行動指針は、過度なミーティングを抑制したり、休みやすい環境づくりに役立っていました。

そして、毎回の活動日には、チーム活動の前に「チェックイン」の時間を持っていました。毎回の話すテーマは担当するメンバーが決めますが、自分達の状況や思っていることを共有する時間です。例えば、わたしが入ったチームの共通点は「糖質が好き」だったので、「最近オススメのお菓子」を話したり、「出産の思い出」「夫との出会

い」など、プライベートな体験などが話題に登って盛り上がりすぎました。それが「和み要素」となりチーム運営に効果的だったと、後から振り返って思います。相手のプライベートを知っておくことで、自己開示がしやすくなり、「最近夜泣きで眠れなくて」など相談に近いつぶやきが、ため息とともに吐き出される場にもなります。メンバーは共感的に関われる立場でもありますし、作業上の配慮もできます。「無理しなくて大丈夫よー」という言葉が交わされ、復帰してくると「おかえり〜」と言い合う、そんな関係性が築けていきました。

子育てをしている当事者同士だからこそその連帯感もありましたが、①ルールや行動指針づくり、②自己開示などは仕事上のチーム作りにも応用できるものだと思います。よい関係が築けたからこそ、活動が終了したあともオフ会を企画しておしゃべりの時間をもったり、LINE グループを作ってつながりを保ち続けています。

#子どものために、

わたしが生き生きと働くこと

最後に、この育休イノベの活動を体験して、子育てしながら働く母親として大切にしたいことを表明したいと思います。それは、わたしのご機嫌はわたしがとる、をスローガンに、子どものためにわたしが生き生きと働くことを行動原理にしようと思います。「子どものために」という部分は、平日日中を中心に、経済的な基盤を維持しつつ、社会とのつながりを示すということ、
「わたしが生き生きと働いているか」については、やりがいを感じているか、自身の成長を感じられるか、それは社会に貢献するものなのかという要素を確認していこうと思います。改めて自身の大切にしたい価値観についても確認できた活動でした。